

80年前の太平洋戦争末期、富山県は学童集団疎開先として、東京都内の4つの区から約15,000名の学童を受け入れました。企画展では、疎開生活の様子や疎開を受け入れ支えた方々の証言、児童が疎開中に毎日書き綴った絵日記、今も交流を続ける学校の活動を展示し、改めて平和の大切さを考える機会としました。



「どうして富山に?」「後から1・2年生も疎開した!」



どこに疎開していたのかな?



疎開生活の様子 (1日の流れと出発から帰京までの流れ)



「どんなものを食べていたのかな?」



疎開を受け入れ支えたとやまの人々の証言



書き綴った絵日記(東京女子高等師範学校附属国民学校)



疎開中使用していた机、関連書籍



今も続く交流の様子



時代は変わりましたが、戦争も差別もなくなっていません。これから私たちがどう生きていくのか、人を育てていくのか考えさせられます。